

# 歩 & 目 足 目 足

Vol.87

いさき  
宇部と磯崎、上田孫市物語

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・  
近代化遺産活用アドバイザー

瀬戸内海に面した八幡浜市磯崎、こ  
は幕末期にシーボルトの弟子となり活躍  
した蘭学医二宮敬作の生誕地である。こ  
の集落の中に、全く知られていないお屋  
敷が存在する。もう何年も前、ここを初  
めて訪れた際、独特な長い塀に囲まれた  
その存在感に  
目を見張った  
事を思い出  
す。ブロッケ  
塀のようなグ  
レーの色合い  
だが、形は煉  
瓦サイズ。で  
も赤煉瓦では  
なく、愛媛



旧上田孫市邸(現大塚家)

周防灘に面した山口県の宇部は、伊予  
灘に面した八幡浜磯崎から、海上だと西  
北西に直線距離で約110km余り。沖  
ノ山炭鉱など海底炭田の開発を基に発展  
した産業都市。明治18年生まれの孫市  
は、長じて父李次郎の坑木業を手伝うよ  
うになり、渡った時期は不明だがやがて  
宇部の材木商として自立する。家督を継  
いだ同43年には渡邊祐策の経営する沖ノ  
山炭鉱や神原炭鉱の指定商人として坑木  
販売を開始している。因みに坑木とは、

ではたまにしか目にしない素材で出来て  
いる。その違和感がとても気になった。  
これは何か物語がありそうだ、ウォッ  
チャーとしての直観がうずく。  
ご縁を得て調べると、やはりなかなか  
のエピソードが潜んでいた。現在この建  
物は大塚家として守られているが、かつ  
てこれを建てたのが上田孫市という立志  
伝中の人物だという事にたどり着く。果  
たして彼はどのような時代を生き、何をし  
てこれだけの住居を建てるに至ったの  
か。そのルー  
スをたどる為  
に、山口県宇  
部市に行かねば  
ならない。



上田孫市

明治期の佐田岬半島では多くの銅鉱山が  
開発されていたが、宇部では炭鉱地帯、  
そうした坑道を維持するための坑木需要  
があつての事である。一方渡邊祐策は明  
治から昭和にかけて活躍した大実業家  
で、宇部発展の礎を築いた事で今も敬愛  
される。炭鉱やセメント製造、窒素など  
氏の経営する4社が合併したのが後の宇  
部興産である。何より孫市が経営力を発  
揮出来たのは、この人物の知遇を得た事  
が大きかったに違いない。事実、地歩を  
固めた頃の大正10年、孫市は宇部村議会  
に立候補し、ヨソ者ながら見事にトップ



愛媛には見られない神棚の意匠



鉱滓煉瓦の塀



凝った庭の様子

当選を果たしている。その数か月後に宇部村はいきなり宇部市に市制移行を果たし、初代の議会議長が渡邊翁だったりもする訳だが、当時の宇部は最も繁栄期に入っていたと思われる。



仏壇上の欄間、羽衣の絵(磯崎のものと酷似)



平成28年7月、宇部、兵頭喜美枝氏宅にて(当時上田木材に勤務していた方の住居)

孫市のかの地での活躍は様々な。まず旧領主福原家(長州藩家老)の築造した常盤池の畔に料亭ひさご亭を建て(同6年) 人気を集める。同8年には宇部商工会が設立され、彼は副会長となる。翌年には日本赤十字社山口支部の病院建設に千円の寄付。やがて数万円の

工費を投入して常盤池の遊園地経営を企図し「常盤遊園開発組合」を発足させる(同10年)。錦橋の架設を發起し千円の寄付(同11年)。更に翌年、県立宇部工業学校の設置に際しても私財一万円を寄付など。

しかし、上げ潮ばかりの人生でも無かったようで、第一次世界大戦後の不況で材木需要が低迷、財産整理をする事となり、常盤池池畔の所有地を渡邊翁に相談し売却。それがやがて現在の市民公園として愛されている常盤公園になつてゆく。

近年まで宇部での旧上田邸が村上医院として



渡邊翁記念会館(国重要文化財) 昭和12年築、設計村野藤吾



沖ノ山炭鉱船着き場の坑木置き場(大正15年宇部市写真帳より)



磯崎に建つ二宮敬作翁銅像

残っていたが、数年前に解体されている。さて、八幡浜市磯崎に残る旧上田邸である。あの独特な灰色の家敷塀は、やはりルーツが宇部にあることが判明した。石炭や石灰岩の多い宇部界隈、あるいは北九州エリアでは一般的によく見られる素材で、ビルや住宅の塀などによく使われ、当たり前の光景として町中に存在する。例えば八幡製鉄などでは製錬時に大量のスラグ(鍛・カラミ)が生産され、その廃物利用として鉾津煉瓦が再生産された。副産物としての産業遺産でもある。室内の神棚の異形や、仏壇の欄間に見られる絹張襖絵仕立ての部分など、明らかにあちらの文化が磯崎に出現しているのだ。孫市は昭和14年3月1日、郷里で55歳の若さで亡くなるが、今年はその没後80年に当たる。故郷が輩出した偉人二宮敬作と併せて、時代は違うもののその事績に光が当たって欲しいと願う。